

5

5. 泡盛 6. 製氷 7. 燐寸 8. 藥品
二. 昭和二三. 一 輸送船大建丸 官古島平良港に於て沈没
(軍需品揚陸前)

五. 戰鬥狀況

特記事項ナシ

六. 給養衛生

1. 給養 上陸ヨリ昭和二三. 七迄集團命令ニ基テ給養ナリシモ
同年八月ヨリ主食不足ニ依リ自活ヨリ甘藷ヲ混セリ

2. 衛生 一般ニ良好ナリシモ「マラリヤ」ニヨリ五名ノ死亡者ナリ
其他「チフス」赤痢 数名四罹患ナリ

七. 終戦ヨリ歸還迄

豊作命ニ基テ各隊軍需品ヲ集メ官古文廳ニ文件ス

戰史資料

國有部隊長所在地 第三師團通信隊(沖縄縣宮島)

調製官 第三師團通信隊長 陸軍少佐 國武 達 雄

編成裝備關係

1. 編成定員二二名 編成現員五〇九名

2. 將校職重長

第三師團通信隊長 陸軍少佐 國武 達 雄

附將校 陸軍中尉 吉 津 柏

石垣派遣有線隊長 陸軍大尉 八 木 市 藏

特設有線隊長 陸軍中尉 山 瀬 東 三

有線第一小隊長 陸軍少尉 山 田 良 行

有線第二小隊長 全 鍵 谷 健 三

無線隊長 陸軍中尉 赤 澤 稔

航空保安隊長 全 北 川 良 二郎



3 ナレ

4 宮古中學校職員生徒一九三名依り鉄血勳皇隊、編成

三 部隊復歴、概要

1 昭和十五年八月十三日滿洲國新京、於テ第三八師團通信隊編成

2 同 年同月三日哈爾濱移駐、同地附近、整備

3 昭和十九年四月八日齊々哈爾濱移駐、同地附近、整備

4 同 年七月八日齊々哈爾濱出發

5 同 年同月二十日釜山港上帆

6 同 年八月十二日沖繩縣宮古島上陸、同地附近、整備

7 同 年十月十三日南西空襲

8 昭和十九年二月十六日電信第三十七聯隊第五中隊殘留員有線三小队編入

9 昭和十九年三月十六日天龍作戦参加

10 同 年八月十五日大東軍戦争終戦

11 同 年九月二十五日中央航空路部沖繩管区第五保安中隊宮古島上陸並第十六航空通信

昭和十四年十二月編成時

陸軍

聯隊第四中隊一ノ分隊編入

12 昭和二十一年一月二十日米軍指示依り一部沖繩本島へ出發

13 同 年二月二日主力復員、為ノ宮古島出發

14 同 年二月九日浦留港上陸

15 同 年二月十一日復員定結

三 指揮系統關係其ノ交遷ノ概要

1 昭和九年八月宮古島上陸、同時、沖繩軍通信隊一中隊ヲ指揮下ニ入ラシメラル

2 昭和二十年二月石通信中隊ヲ隷下ニ入ラシメラル

3 昭和二十年九月長期駐留態勢確立、為ノ中央航空路部沖繩管区第五保安中隊

宮古隊、第十六航空通信隊第四中隊一ノ分隊、沖繩軍通信隊(電信第三十六聯隊)

第五中隊第一小队(無線隊)ヲ隷下ニ、獨立第四電波警戒隊、第六對空無線隊ヲ

指揮下ニ入ラシメラル

4 昭和二十年十二月獨立第四電波警戒隊、第六對空無線隊復員、為ノ宮古島出發

同時、指揮下ヲ离ル

四 作戰準備關係

一 作戰計畫、概要

一 防禦方針 有線ヲ以テ宮古島航空用地上通信網並ニ作戰用骨幹通信

網 無線ヲ以テ先島集團離島通信網ヲ確保セントス

二 防禦配備 主力ヲ以テ集團戰鬥司令部附近ニ一部ヲ以テ飛行場附近ニ

位置シテ

三 陣地、狀況 (含通信施設、通信所、交換所)

一 起工時期 昭和十九年八月三日

所要人員 一日當リ 百名

使用資材 上工器具 爆藥

四 完成時期及強度

第一期 昭和十九年十月三日

完成時期 第二期 昭和二十年三月五日

第三期 全 年八月十五日

三割

強度 五割

八割

八 敵攻雲、依ル破壊補修狀況

一 陣地、破壊ナシ

二 飛行場周辺、有線通信網天候作戰中五割、被害アリタリ

九 作戰準備、關スル主要ナル命令、内容

一 上陸當時通信隊宮古島防衛戰鬥計畫ヲ作成下令ス

二 南西空襲時航空部隊ニ防刃命令下令ス

三 天祈作戰間航空部隊援助ヲ為シ通信協力命令ヲ下令ス

四 軍需品、集積狀況

一 現地自活 九月以降概テ調行レタリ尚五〇名給養自活ヲ實施セリ

二 訓練、狀況 毎月數回通信修技ヲ實施 集團戰鬥計畫ニ基テ

通信綜合演習(四回)實施

五 戰鬥狀況

一 昭和十九年十月南西空襲時主力ヲ以テ航空作戰用通信ニ任ス

二 昭和二十年三月以降天祈作戰間主力ヲ以テ航空作戰用通信ニ任ス

八、本島駐留間作戦用骨幹通信、離島通信、確保ニ任ス

二、昭和三年五月初旬英國機動艦隊、艦砲射撃ヲ受ク

三、毎日百機内外ノ敵襲ヲ受ク

四、不明

五、不明
部隊ニ關係ナシ

六、不明

六、給養衛生

一、給養、給養大部ヲ部隊携行糧秣ニシテ為メ逐次補給、逼迫ニ伴ヒ

減食、止ムニ至リ六七八月、主食三〇〇反ヲモ確保シ得サル状態ニナリタル

モ必死、現地自活、推進ニ伴ヒ概テ十月頃ヨリ順調ナル給養ニ復シタルモ副

食特ニ野菜、生肉類不足シ凡ニル野草、生物ヲ食シ之カ補給ニ努メタリ

不衛生

昭和三年初頭以降不順ナル氣候ト過激ナル労働ト給養、低下トヨリ胃

腸性疾患、脚氣特ニマラリヤ患者ノ頻発ヲ見、終戦時ニハ兵員ノ五分ノ一

昭和十一年十二月、陸軍省

陸軍

二、達セルモ給養ノ向上ト氣候ノ回復トニ伴ヒ逐次治愈シタリ

尚本島駐留間ノ戦死者四名、戦病死ニ五名、入院患者五八名ナリ

(部隊人員五〇名)

七、終戦ヨリ帰還迄ノ行動ノ概要

長期駐留態勢確立、為シテ現地自活態勢ヲ推進スル一方、復員後ニ

於ケル將兵ノ心構、職業指導、教育ヲ實施シ、新日本建設ノ礎石タラシム

トスル心身ノ錬磨ニ努メタリ